

八甲田山酸湯温泉

郡場寛

酸湯温泉は八甲田山の西方中腹海拔二千九百尺、青森から六里餘の所に在る。青森から横内村迄は馬車を通ずるが其上は未だ車には容易でない。馬に乗るか歩いて居る。尤も此所は近頃青森から十和田に通ずる郡道になつたから段々改良される事と思ふ。

酸湯は二百餘年前獵士が鹿を追ふて發見したと云ふので鹿湯と呼ばれたのだが、此地方の發音には一とすの區別がないので他縣人の耳にはすかゆと聞こえ、酢ヶ湯と書かれ、今では酸湯となつたのである。然し特に酸の多い湯ではない。

温泉は皆硫黄泉で都合四ある。一は熱の湯と呼び、湯の湧いて居る所を廣く掘り下げ、其上に大きな浴槽を入れたもので、其名の示す通り

體が良く暖まり、冷性から來る病氣殊にレウマチス、痔、婦人病などに能く、皮膚病にも勿論良い。第二は鹿の湯と呼び湧口から長い樋で導き高さ一丈餘の湯四本にして落して居る。温浴とマツサーチを兼ね、消化器及神經系統に效き、又傷にも宜しい。第三は温度は高いのだが冷の湯と云ひ、のぼせをさげ目にも良い。第四は玉の湯と云ひ、餘り特徴のない軽い湯で、他の強い湯に入つた身體を洗ひ休めるに用ひられて居る。此四の湯槽が七間に八間の大きな湯小屋に集められて居るのである。湯が強く皮膚がやけるので、浴衣を着て入浴して居る。此温泉の他に異なる一の特徴は三日で一廻り往復十日で間に合ふ事である。

園にお話するが青森縣地方には湯から上つた

後、體が長く暖まつて居るか又早く湯冷めがするかに由り、溫度の如何に係らず、湯を大體熱と冷ひやとに分つ習慣がある。酸湯では熱の湯にばかりはいて居ると眼が悪くなると云ふので冷の湯でのぼせを下げる様にして居る。尙青森地方には湯に入りながら小桶で頭に湯をかぶる習慣があり、是ものぼせさげの一法とせられて居り、一二三四ひふみと節を附けて歌ひながら千杯もかぶる人がある。

此溫泉は湯主數名の組合になつて居り宿屋も共同計營である。まだ道路が良くないので設備も行届かず、都人士の遊樂地としては不適當である。然し效能が顯著なので地方の人は勿論、遠く北海道樺太等から海を越え不便をも顧みず澤山湯治に来る。レウマチで人背に負はれて来た人が、六里の山路を歩いて歸る程良くなる事もある。

湯治の季節は普通春彼岸から秋彼岸迄とせられて居るが冬の吹雪く季節の外は何時でも行かれる。昔まだ路の開けない折には春堅雪の時丈

け湯治に来たのださうだ。今でも春三四月は浴客が最も多い。又位置が八甲田の中腹に在るので夏の間は登山者や、葛溫泉を経て十和田に行く人の足溜りになる。

附近には名勝が多い。すぐ近くには酸湯公園があり、噴出の跡が自然に庭園や湯沼を作つて居り、津輕平野を越えて岩木山、日本海迄一望の内に納まる。又荒川の上流大河目の谷が南方十餘の所に在り、其溪を登ると三階瀧、七瀧などがあり、下流には城ヶ倉と云ふ材木岩其他の奇景に富んだ所がある。又八甲田連峯中の酸湯岳、井戸岳、赤倉岳などは女子供にでも行かれ噴火口やお花畑なども親しく見る事が出来、良く晴れて居ると蝦夷富士鳥海山迄も見える。又葛溫泉に行く途中には石藏岳の奇岩兀突たる所があり、高田泡と云ふ高山性の沼野もある。夏の避暑にも良く、十月始の紅葉も美はしく、近頃は又スキーで行く人もある。凡ての景色は雄大であり氣品がある。

青森縣にはまだ紹介すべき溫泉は澤山あるが

僕は幼少の頃から此の温泉此山に馴れて居るの

で特に茲に其概略を紹介する次第である。

徳川時代の有馬温泉

の案内記として書きたいものは恐らくは今から二百四十年前の貞享 年有馬の谷之町齋屋五郎兵衛開板といふ有馬小鑑(振假名ひざりあんない)とある三十二葉の半紙本などであらうと思ふ。茲に掲げた二枚續きの板書で其の面影を窺へる筆者は多分有馬の僧侶らしく寺院神社等のこまが多く、町及び温泉のこまは左の數節に過ぎぬ。

一之湯十坊

大湯女はいづれもかゝさいへり 小湯女

- 一 御所坊 まさ 一 掃部 なつ 一 伊勢屋 たけ
- 一 中の坊 つね 一 尼崎坊 ゆり 一 ねぎや すぎ
- 一 大門 たつ 一 角の坊 つた 一 上大坊 くり
- 一 わかさや いち

二之湯十坊

- 一 池之坊 まつ 一 下大坊 なべ 一 休所 たけ
- 一 川崎や やく 一 茅之坊 たい 一 川のや みつ
- 一 大黒屋 たけ 一 素麴屋 ふし 一 ひやうふ みや

一みつふれ つじ

町の名寄

- 一 門之外 一 門中之町 一 寺田町 一 藪之内町
- 一 谷上之町 一 谷下之町 一 北之町 一 へうたん町
- 一 上道町 一 かぎの町 一 魚之棚町 一 大藏町
- 一 筆屋町 一 つかや町 一 かぢ町 一 上ふだい町
- 一 たぬき戸 一 だんさき

一 一の錢さりば中こう仁西上人吉野にて門前こぬ申たるもの此所へめしつれさせ給ひて御やくしのには町の掃除等のやくなつさめ湯治の衆一間にて鳥目四十二文づつうけていさなみにせよと上人よりの遺誼なり。

一 温湯かゝりやう。養生のうた

あしほさきかしらは後かゝるべし

たゝるはなが湯扱はすきはら

一 目あらひ湯 一 後妻湯 谷の町の内上下に二所有なり。湯ぶね三尺四方ばかりにかり屋あり。此湯のわきやうは湯のはたにていかにもたからかに。おのれは人のおとこをぬすみさつて